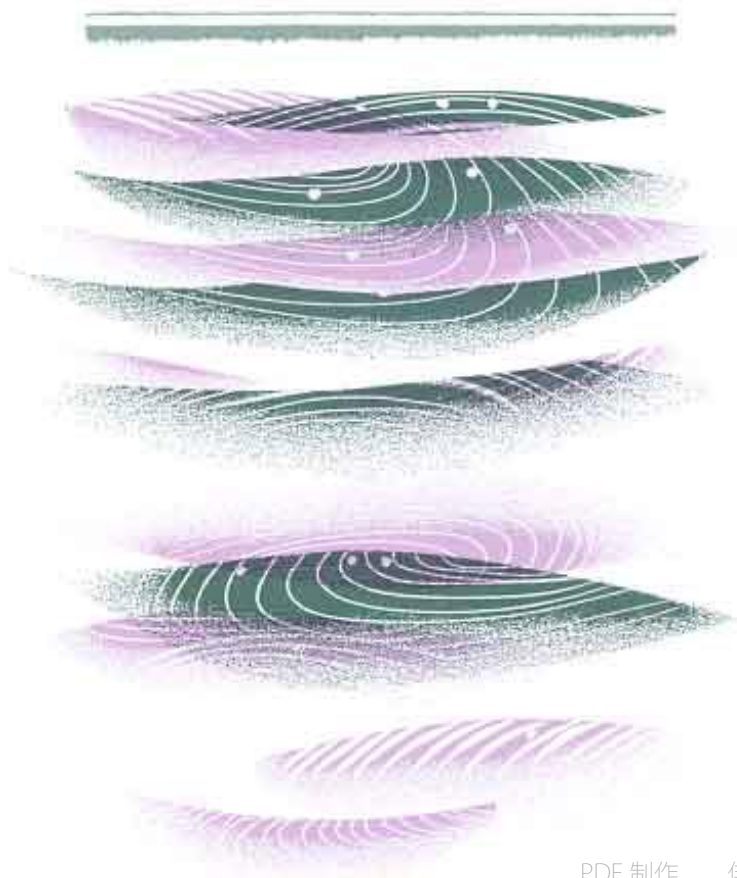


昭和66年2月1日第3種郵便物指定  
平成16年1月1日発行(毎月1回)1頁発行  
集刊誌「俳句」第35巻第4号

俳句雑誌「おき」



4月号



沖  
発  
行  
所

PDF 制作 俳誌のsalon

# 霰 緋

林 翔

## 恋の句

雨 か 否 芝 生 は 霰 緋 な る

椿 落 つ 沙 漠 に あ ら ぬ 黒 土 に

芽 吹 き け り 樹 に は 健 忘 な か り け り

人 間 に も 未 来 い つ ば い 梅 ふ ふ む

二月の同人句会は余儀ない事情で欠席し、句稿だけ送って貰うことにした。余儀ない事情とは、「千代田葛彦を偲ぶ会」への出席である。第四回俳人協会賞も得た「馬酔木」古参同人千代田葛彦氏は昨年十一月二十二日に他界されたのだが、遺志により、通夜・葬儀は家族・親族のみで執り行われた。しかし「馬酔木」としてはそれでは済まないで右の「偲ぶ会」を開き、盛会であった。

翌日、同人句会の句稿が届いた。勿論、作者名は付けてない。そして私が特選に選んだのは、

風光る汝の黒髪にヘアピンに

の句であった。比較的若い男性の作と思われるが、俳壇が一般に高齢化しているから、こういう句はまことに珍しいのである。

沖人の句集からも、探せば少しはあるのだろうが、探す時間も無いの

心写すカメラもがもな梅ひらく

紅梅の鮮やか胸も灯ともされ

紅梅に後を託して春うすつく陽

雛の日の駅にまつかつかの服よ

艶つやのブーツ大股春乙女

卒寿

九十段登りてうれし春の風

で、平成六年九月に角川書店から出版された黛まどか句集『B面の夏』から若干抽こつ。

会ひたくて逢ひたくて踏む薄氷  
ふらここや恋を忘るるための恋  
水着選ぶいつしか彼の眼となつて  
星涼しここにあなたのみる不思議  
好きだから言へる意地悪ソーダ水  
遠雷や夢の中まで恋をして  
兄以上恋人未滿搔氷  
初めてのデート初めての白日傘  
恋終る九月の海へ石抛けて  
恋人を待たせて拾ふ木の実かな  
木枯しを来し恋人の黒づくめ  
山眠る恋の終りを見届けて

林 翔



# 猫車

能村 研三

永井荷風展

詠めるまで詩囊を晒す寒月下

詠み人は雪の足らぬを嘆きをり

搬入の絵と学芸員の白マスク

逆境は撥条にと薄氷跨ぎをり

三月十三日から市川市文化会館で「第五回市川の文化人展」として「永井荷風展」が開催されている。今回は「荷風が生きた市川」と題して、荷風の作品『葛飾土産』などに描かれているありし日の市川の風景や印象を紹介すると共に、当時の荷風を知る人の評言や写真なども展示し、市川での荷風の暮しぶりについても紹介している。

私も昭和三六年まで荷風終焉の地から四百メートルの所に住んでいた。ほぼ生活圏は一緒に、馴染みの店なども共通して親しみを感じる。現在京成八幡駅から八幡小学校へ行く商店街の通りは、昔「荷風通り」と名付けようという話があったそうだ。

日本最高の日記文字と評される「断腸亭日乗」にも、「大黒屋」や「菅野湯」、「八幡三菱銀行」なども実名で登場し、私にとつては馴染み深いも

櫛 咲 く 腕 上 々 の 猫 車

潮 筋 に 色 を 透 か せ て 若 布 刈

旅 に 来 て 覚 悟 の 寒 さ に は あ ら ず

雛 の 日 の 鏡 の 中 の 鏡 見 ゆ

桑 を 解 く 湖 尻 の 波 に ち か ら あ り

か ぎ ろ ひ て 思 ひ 違 ひ は 解 け ぬ ま ま

のがある。

今回の荷風展では商店街の文房具屋さんや和菓子屋さんに荷風が買い物に来た時の話も紹介されている。

まさにこの商店街には、今もなお荷風の面影を垣間見ることができ、文京区の千駄木は、昔から森鷗外や夏目漱石が住んでいたことから街路灯の下に「文豪の町」というプレートが掲げられており、又、谷崎潤一郎記念館のある兵庫県芦屋市なども市民が一緒になって一人の文豪を顕彰している。

市川も今回の荷風展をきっかけに少しは「市川の荷風」という意識が高まり、何らかの形で顕彰される機運が生れてくれれば良いのだが。

能村研三



# 蒼茫集



小鈴の音 田所節子

春着の児所作に小鈴の音が添ひ  
敷き藁に柀目の日差し寒牡丹  
一寸に意志ありありと牡丹の芽  
雪原の足跡のみが頼りなり  
まんさくの日差しにもつれぬるやうな  
六十路まだ明日へ炎えぬる牡丹の芽

涙法師 大畑善昭

声のよき鴉を褒めて春立てり  
須臾たりき氷柱に茜差したるは  
よく晴れて涙法師の氷柱なり  
雪下し了へ梯子まで戻る腰  
霧氷林睡毛ひつつくことしきり  
道よぎりたる彼の貂を忘れ得じ

鍋ごと 藤原照子

切餅の耳いまはなし夫もなし  
ふぐ雑炊いちはやく捌け下戸の席  
七十路や冬芽まるきも鋭きも  
子の家へ鍋ごと運び鯰大根  
樽を足す木地師の息のぬきどころ  
蓼科・女神湖  
月光をくまなく延べて結氷湖

歩幅 菅谷たけし

一日を早めに閉ぢる玉子酒  
菰藁に色燃えうつる寒牡丹  
一本のひかりの筋や御神渡  
駒ヶ岳ロープウェイ  
雪の壁ふはりと越しぬ鳥ごころ  
踏めば歎く雪畏れつも且つ樂し  
雪搔いて山祇祀る囲い縄

# 潮鳴集



陰膳 秋葉雅治

裸木にいま薄ら日の衣とどく  
酒の名に越や信濃や春深雪

代替りても

春ゆふべ「卯波」にいまも波郷の座  
嫁せし子へ陰膳めきて雛かざる  
春満月砂漠の仮寝いかならむ

手遊び 古山智子

寄鍋の鱈にうつすら虹のいろ  
さよならのあとの静寂や冬茜  
除雪車のはき上ぐ雪のうす濁り  
ストーブの前身遊びのきりもなし  
札納土へ戻らぬものあまた

風となる 高橋ちよ

枯野原人声のみな風となる

一叢の寒菊しやんと鳩子の忌  
神に捧ぐ水に香のあり春隣  
牡丹解く懐ごこちの日溜まりに  
雨音のやがて波音冴返る

寒梅 柴崎英子

寒梅や卒寿なる師の声の張り  
鬼やらふ夫この頃の気の短か  
ながながと鶉の夕鳴き春隣  
ふくろふの深慮の眠り疑はず  
春の夜の炙りて甘き貝柱

佳境 瀬戸石葉

宇佐はそれ古来武の神破魔矢うく  
代替りせし家ばかり年酒酌む  
掘り出されても冬眠の佳境なる  
零歳の死や寒鯉のみぢろがず  
夢見るに似たり回顧の日向ぼこ

# 沖作品



## 能村研三選

生きいきならぶ天気図の雪だるま

東京

石川 笙児

日と水と風たかぶらす猫柳

首塚におよぶ冬日や石蛙

(大手町将門塚)

鯛焼の筋力萎へてゐたりけり

寒晴や名のみ残りし富上見坂

乳頭の色あたたかき枯公孫樹

千葉

鈴掛 穂

思はざる光のオブジェ寒林に

若さとは前へ出ること冬木の芽

水仙へふと眼をやりぬ調律師

冬萌や印旛にすこし風のきら

零余子飯招ばれ古風な貌となる

新潟

長谷川 春

うしろ姿山頭火めく冬鴉

そばにゐることも孝行着ぶくれて

生き字引などと言はれて冬ごもり

大寒のつるりと真白茹卵

声変はりまだせぬ気合寒稽占

東京

齋藤 實

手毬唄肥後がどこかを知らぬなり

葉牡丹に笑ひ皺とてありにけり

天草五橋絵踏のごとく渡りけり

青空に紅梅の色とどまれり

初日の出いま万物の沈黙す

こんもりと嬰ねむりをり初座敷

寒月に表面張力感じをり

凍滝やもの言へば刻流れ出す

林間をけものが急ぐ追儼の夜

雪嶺の天辺何もなく晴るる

人氣なき寒天干し場八ヶ岳囲ひ

気の遠くなる高みへと春の鳶

八ヶ嶺の藍の淵より月氷る

薄墨に花の色足す蕪村の忌

源泉の森燦然と雪籠る

岳麓に幹の鼓動や涅槃西風

静岡

今瀬 一博

市川市

近藤 栄治

長野

矢崎すみ子



七曜の始まりのよき二月かな  
東京 福嶋千代子

小面の内に闇あり咳こぼす  
風岬わらべ塚守る野水仙  
如月や沖にふるへる集漁灯  
声高に段取り交はず朝焚火  
炭の出来叩き確かむ峡日和  
楯円形はやさしき形寒卵  
大分 吉武 千束

しがみつく樹氷日が削ぎ風が削ぎ  
冬木の芽烈しきものの予感かな  
底冷の歳月積みし剛さかな  
かぎろへるあの頃のこと今のこと  
もの想ひしかと膨らみ梅の宵  
のれんよりはみ出す背中おでん酒  
京都 浅岡 由恵

大樺冬迎へうつ構へかな  
掛軸の師の墨跡の淑気かな  
渋滞のトンネル抱へ山眠る  
餅掲ぎの捏ね姉さん被りかな  
荷を持ちしままの御慶や配達夫  
鉢巻の新的手拭漁はじめ  
追ふやうに送り出されし女正月  
日溜りの臘梅溶けてしまひさう  
枯盧に風のかたちの残りけり  
一湾に風が靄よぶ女正月  
堅香子や胸中若くあれかしと  
市川市 内山 照久

千葉 小松 誠一

深田 雅敏

うららかや神の箸置伊豆七島  
冬の蜂なほ渴命の探り足  
冬もみぢからくれなゐの沼鏡  
吹雪く夜の津軽は籟の忿りとも  
逆波の咽ぶ蛩びと冬ごもり  
弾き初めは婚近き子のアヴェ・マリア  
真夜中のほのと冷たき待機灯  
日脚伸ぶ足ほの紅き鳩の群  
数へ日や自づからなる前のめり  
夕映えを風のゆらしぬ白障子  
長崎 沖島 孝光

市川市 栗原 公子

生きいきならぶ天気図の雪だるま  
若さとは前へ出ること冬木の芽  
生き字引などと言はれて冬ごもり  
天草五橋絵踏のごとく渡りけり  
こんもりと嬰ねむりをり初座敷  
林間をけものが急ぐ追儼の夜  
八ヶ嶺の藍の淵より月氷る  
七曜の始まりのよき二月かな  
楯円形はやさしき形寒卵  
冬木の芽烈しきものの予感かな  
石川 笙児  
鈴掛 穂  
長谷川 春  
齊藤 實  
今瀬 一博  
近藤 栄治  
矢崎すみ子  
福嶋千代子  
吉武 千束  
浅岡 由恵

### 新人賞予選句（四月）

# 沖作品 選後句評

\*  
能村研三

生きいきとならぶ天気図の雪だるま 石川 笙児

この句は東京例会で注日した句。テレビの天気予報を見ていると日本列島が描かれた地図が出てきて、冬だとまずは日本海側に縦縞の等圧線が込み合った図が表示され、天気予報士の解説では西高東低の冬型であることが解説される。次に各都市の天気の状態がマークで表示される。晴れは太陽のマーク、曇りは雲のマーク、雪は雪の結晶か雪だるままで表示されることが多い。太平洋側は殆どが太陽の晴れマークで、日本海側は雪だるまの雪のマークが並ぶのが冬の天気図の一般的なもの。時には激しい雪が予想される時などは、雪だるまに降る雪も吹雪のよう激しく降る。この句の「生きいきとならぶ」雪だるまであるから、雪の降り方も激しく日本海側の殆どの都市が軒並み雪だるまが並んだのだろう。ただこの句、句会の時にもある人から、実際の雪だるまではなく、天気図上に描かれた雪だるまも季語として成り立つかという質問があったが、私はこれも現代社会の情報の一つとして、天気図上の「雪だるま」からも、実

際の厳しい冬を心に受け止めることができるので、季語として成り立つというお話をした。

若さとは前へ出ること 冬木の芽 鈴掛 穂

「若さとは前へ出ること」と言っても、成人式で一部の若者が公会堂の壇上に駆け上がったあの懐かしい行動のことではない。この句は若者というより、ある程度の年齢の方が、肉体的な老いと戦いながら自らをほげますために積極的な行動に出ることを言い聞かせているようにも思えた。植物でさえ春を待ちきれないで冬芽をつける姿は感動的で、何か生きる勇氣を与えられるような気がしてきた。

生き字引などと言はれて冬ごもり 長谷川 春

いろいろな事に経験を積み、全てを知り尽くしているような人のことを「生き字引」という。この句で言う「生き字引」も町や村の長老とでも言うのか昔からそこに住みつづけている人で、その地域のことなら何でも知り尽くしている人。しかし、こういう人は得てして自分からは積極的に喋りたがらないものだ。と言うのも、その人の知恵袋の中には良いことも勿論であるが悪い事も知っていて、どうしても口が重くなってしまっただ。「生き字引」などとする意味で祭り上げられるのも良いが、「冬ごもり」という言葉からも、世の中の一線から身を引いて客観的にものを見ていこうという姿勢が窺える。(以下略)